

陸生ホタル研

No.54

2013年12月25日

陸生ホタル生態研究会事務局

電話：FAX042-663-5130

Em:rikuseihotaru.07@jasmine.ocn.ne.jp

これからは千の風になって・・・・・・・・



先に、月報 52 号でお知らせいたしましたように当会の会長小西正泰は、2013 年 8 月 25 日に肺炎のため永眠しました。享年 86 歳でした。

1998 年の板当沢ホタル調査団の発足から、その後この調査団の事業を継承する形で発足した陸生ホタル生態研究会の現在まで、16 年の長きにわたり全国の研究者、会員・調査協力者の皆さん方から頂きましたご厚情に対しまして、改めて厚く御礼申し上げます。

小西正泰 略歴

1927年 兵庫県西宮市に生まれる
父親の勤めの関係で小学生時代は、秋田県で過ごす
幼少から捕虫網を担いで山野を巡り、昆虫図鑑に親しむ
青森県立弘前中学校（現在の青森県立弘前高等学校）卒業
北海道大学農学部農業生物学科 卒業
同大学院農学研究科修士課程 修了
キクイゾウムシの分類の研究で 同大学より博士号を授与
農学博士
北興化学工業株式会社 技術顧問
学習院大学 講師
アンリ・ファールブル会 理事
野川ホテル村 村長
東京ホテル会議 議長
日本ホテルの会 理事
板当沢ホテル調査団 団長
陸生ホテル生態研究会 会長

主な著書

虫の文化史	朝日新聞社	1977
虫の博物誌	朝日新聞社	1993
昆虫の本棚	八坂書房	1999
虫と人と本と	創森社	2007
その他	多数	

※ 昆虫文化史の研究で、昆虫関係文献・蔵書の多さでは四天王の一人と言われていました。皆さん方からご好評を頂きこれまで陸生ホテル研のHPに掲載してあった写真は、蔵書が万単位になり屋内に収蔵できなくなって庭に建てた書庫の前で撮影したものでした。

小西正泰と私たちの歩み

東京ホテル会議から板当沢ホテル調査団（1994～2007）

東京都小金井市を中心にゲンジボタルの保護・保全運動を展開していた野川ホテル村（村長 小西正泰 事務局長 彦坂和夫）の中心メンバーの奔走で、1994年に東京都下の自然保護団体や都議会、多摩動物公園、三多摩にキャンパスを持つ大学、高校関係などにも呼びかけて「東京ホテル会議」が設立され、小西正泰がその初代の議長になりました。この頃小西正泰は、日本ホテルの会の理事でも在りました。当時、東京都下の三多摩地方は、バブル経済の宅地開発ラッシュがいくらか収まってはいましたが、状況は依然厳しく毎年開かれた東京ホテル会議のサミットや研究会では、環境保全のシンボルとして都下に

におけるゲンジボタルの保護運動がサンクチュアリ造りを中心に熱っぽく語られていました。

こうした状況の中で、鈴木浩文先生（東京都立大学 現在首都大学東京）から「日本産マドボタル属幼虫の色彩斑紋パターン」（大場信義・後藤好正・川島逸郎、横須賀博研自然1995）という論文を見せて頂きました。この中に、クロマドボタル幼虫の色彩斑紋別の分布状況が取り上げられていて、「無紋型」というタイプは、「神奈川県北部、東京都西部山梨県南東部のみに集中的に確認されている」と記載されていました。これは、東京都の西部地域で永年ホタルの保護運動に関わってきた者にとっては大変な衝撃でした。

当時、東京都のホタルの保護・生態研究の中では、水生のゲンジボタル・ヘイケボタルに集中していて、その他の陸生のホタルに関する関心は薄く、その生態や分布についての研究はほとんど行われていませんでした。まして、クロマドボタル幼虫の色彩斑紋の違いについては全く知らない状況でした。

そこで、新たに陸生ホタルの生態を集中的に研究する部門として、1998年9月に東京ホタル会議の中に、東京都八王子市上恩方町の「板当沢」（イタアテザワ）をフィールドとする「板当沢ホタル調査団」が設立され、小西正泰が団長に就任しました。調査団は、その後の1999年3月東京ホタル会議から分離独立して「板当沢ホタル調査団」（研究者15名、アマチュアの調査員26名）となりました。

板当沢は関東山地の南西端にあり、当時農林水産省平塚営林署の管理する全長1.8kmの林道があり、この林道沿いに、ゲンジボタル・クロマドボタル・オバボタル・オオオバボタル・ヒメボタル・ムネクリイロボタル・カタモンミナミボタルの7種のホタルが生息するホタルの生態研究には大変好都合な場所でした。

研究者の中には、昆虫関係で矢島 稔先生、林 長閑先生（故人）、山崎 柄根先生、大場 信義先生、荻野 昭先生、北村 文治先生がおられ、分子生物学では、鈴木 浩文先生、生物化学では浅井 博先生、植物生態学では、菱山虫三郎先生、鳥類の粕谷 和夫氏・写真家で土壌動物研究者の皆越ようせい氏など、大変立派な方々がおられました。

その一方、現場で調査を担当する部門には、貝類学会の栗飯原 一郎氏、森林インストラクターの梅田 彰氏、土壌動物学会の小峰 光弘氏など調査経験の豊富な方々も一部おりましたが、その他大勢は全くの素人の集まりでした。

この調査団を率いて2007年まで9年間にわたり、小西正泰は、いつも優しく丁寧に根気よく指導して、ひとかどの生態研究のできる集団を育てあげました。そして、ここでの調査研究の結果は、2006年11月25日に「(株)日野自動車グリーンファンド」の助成を頂き「日本産ホタル10種の生態研究(A4判300P)」として、調査団から自費出版されました。この本は、2007年に、国立・都・道・府・県立図書館と博物館のすべて、日本国内の28の大学に寄贈されています。

陸生ホタル生態研究会の設立（2007～現在）

日本産ホタル10種の生態研究は、この研究報告書の出版を契機に「板当沢ホタル調査団」

を2007年3月に解散し終了する予定でした。ところが、解散を発表した直後から「板当沢ホタル調査団事務局」のもとに全国各地から、「板当沢ホタル調査団の9年間にわたる調査研究で、ここまで盛り上がってきた陸生ホタルの生態研究を終了してしまうのはいかにも惜しい。何とか継続してやれないものか」と、いうご意見が電話やメールで沢山寄せられました。

しかし、当時、団長の小西正泰は79歳、調査団の事務局メンバーも齢40台が一人、60台、70台の者が中心という状況の中で、果たして何処までやれるものか長期の見通しは立ちませんでした。迷いもありましたが、全国の皆さん方の声援に背中を押されて「それなら、とにかくやれるところまで試行錯誤してでもやってみよう」という決断をして、2007年10月に、「板当沢ホタル調査団」の研究遺産と組織をそのまま土台として引き継ぎ、新たに全国規模の陸生ホタルの生態研究を主目的にした、「陸生ホタル生態研究会」を立ち上げました。現在日本国内には、ホタルの研究を目的にした団体は沢山ありますが、当時、陸生ホタルの生態研究を主目的に掲げた団体は、他には無かったと想います。

上記の通り何とも不安な発足でした。しかし、板当沢時代から16年の長きにわたり指導を受け苦楽を共にしてきた事務局一同は、小西正泰は、会長として、「陸生ホタル生態研究会を設立して良かった」と満足して旅立ったと想っております。

それは、なぜなのかと申しますと、陸生ホタル生態研究会になってから、この7年間で200人を超える会員・調査協力者がこの研究会に新たに参加し、初年度から現在まで7年間にわたり、その方々が、陸生のホタルや水生のホタルの生態に関する新たな知見を次々に発見し発表してきたからです。その内容は、陸生ホタル生態研究会のホームページの「調査月報（現在53号）」の欄にすべて記載されています。

これについて、小西正泰は、生前、「先の見通しも定かでない中での出発だったけれども、とにかく全国からすばらしい方々が駆けつけてくれて、短期間に望外の成果をあげることができた」と、喜んでおりました。

こんな訳で、現在、板当沢ホタル調査団の調査報告としてまとめられた「日本産ホタル10種の生態研究」の内容は、10種の生態に関する限り、その内容を大幅に書き換えて改訂しなければならない状況になっています。会員・調査協力者の中からも「日本産ホタル10種の生態研究」の改訂版を出すべきではないか・・・と、言う声が一昨年あたりから事務局に寄せられています。

そこで、こうしたご意見を踏まえて、一昨年の秋に、陸生ホタル生態研究会になって新たに解明された事項を取り入れて、日本産ホタル10種の生態について、種別のCDを作成する計画を立て、一昨年の11月に第一次案を作り検討会を開きました。その後も検討を重ね13年度末までには10種のうち6種について二次案を作るところまで進んでいました。

こうした中で昨年の正月、精密検査の為一時入院するとの知らせが本人からありました。これまでずっと元気で来ておりましたので、検査を受けてまもなく退院し、正月後にはCDの完成版の検討を再開できると想っておりました。しかし、その思いは叶いませんでした。

8月25日、CDの完成を見ずに永眠しました。これが、唯一心残りだったかも知れません。「最後は孫や子に囲まれて微笑むように、穏やかに天国に参りました」（通夜での奥様の言葉）。

会長 小西正泰がいつも言っていたこと

- 常識を疑ってみる。
- 理屈よりも前に現場で事実を丹念に調べる。
- 調べる過程では誤認も起きる。
- 誤認は現場で事実を丹念に調べ研究することで自から訂正できる。
- 理屈はその後でいい。
- 調査は、いつも楽しく・根気よく・焦らないで。

私達は

今は亡き会長のこの言葉を胸に深く刻んで、これからも日本産ホタル10種の生態研究に取り組んで参ります。小西正泰は、これからは、千の風になって日本列島を吹き渡り、研究を励まし見守ってくれると思っております。全国の会員・調査協力者の皆さん、これまでと同様に今後とも陸生ホタル生態研究会を応援してください。お願いいたします。

陸生ホタル生態研究会事務局（文責 小俣軍平）

小西先生との思い出！！

多摩動物公園－昆虫園－矢島 稔さん、繋がりでお西先生と初めて、お会いしましたが、何時だったのか不明です。小金井市の野川公園に、小西先生率いる、ホタル村が発足した、1986年でしたか？議長に選任された東京ホタル会議の第1回総会（1991年、小金井市公民館）時でしたか？

私の娘が、学習院大学に入学したのが1988年でした。小西先生が同大学で教鞭を執られていると知り、お話しすると、たいへん喜んでいただき（生物学を専攻していたので）、成績表に良い数字が並ぶことになりました。

姫虫研究会の全国大会が、2008年に、福井県勝山市で開催されました。陸生ホタル生態研究会からも参加することになり、私が小西先生と2日間、御一緒（御夫人の願いもあって）することになりました。宿舎に到着後、数多くの研究発表がありました。

21時からヒメボタルの生息地を訪れて観察。宿舎に戻った23時から、ビールを片手に夜中の3時まで、ホタル談義と相成りました。朝6時から恐竜博物館周辺での観察、採集には、先生と私だけ寝過してしまい、期待していた恐竜には会えませんでした。宿舎周辺を先生と散策できた幸せを、今も懐かしく思い出せます。小西先生ありがとうございました。

（荻野 昭）

“巨星落つ、 故小西正泰先生に感謝！！”

小西正泰先生——事実の中に真理が潜む。それを目に見えるものにするには実践しかない。特に小学校では地元に着した“手づくり教育”が何よりも大切である。この年代に培われた感性は生涯素直に心に残る・・・と静かにホタルを通して、私の町田市立大蔵小学校の実践を支えてくださった東京ホタル会議の議長を務められた方である。

私が、毎日が多忙で、時間と対応に追われる校長職を力いっぱい勤めることができたのも、小西正泰先生始め、ホタル研究と実践の先端に行く、陸生ホタル生態研究会の支えがあったからこそである。ここに、改めてお礼を申し上げたい。

事実、人間が出来ないことを、平気で実現してくれる小さな生き物、それがホタル。誰の助けも借りず、誰にも教わらず、自分の力で、力いっぱい光り生涯を終える。

この小さな体のどこにそんな知恵が隠されているのだろうか・・・そのようなことに素直に疑問をもち、調べ、自ら学ぶ、それが小学生。学校はそのような夢を実現する場でなくてはならない。そのような場を用意するのが学校、それが無いのは学校ではなく、学校という建物が存在するだけといえる。

私が願っていたこの夢を実現できたのも、同じ願いをもつ多くの方々に支えられたからこそである。“本当にありがとうございました。”

そしてまた、改めてあの小さなホタルにも私の心の一端を静かに語りかけたい。“ホタルさん、ありがとう。”

(北村文治)

小西先生に教えていただいたこと

私は水と泥の分析を専らとしていましたが、小西先生との出会いが昆虫の世界に飛び込むきっかけとなり、ホタル類の調査をお手伝いさせていただくようになりました。

初めてお会いした小西先生は、学者として気難しいお話をされるのかと思っていましたら、気さくに分かりやすい語りかけで話をされるので、虫の世界が身近に感じられ、勉強を試みようと思いました。私のように他分野から来た者にも分け隔てなくご指導を賜り、虫好きの仲間として扱っていただけたことに深く感謝をいたします。

小西先生とお会いするまでは、フィールドで見た生き物の姿が私の知識のすべてでしたが、観察することが学問の始まりであり、なぜという疑問の答えを考えることが研究であることを説かれ、見るだけではなく考えることの大切さを教わりました。それまではホタルを観察して詳細に記録する習慣はありませんでしたが、文字にして記録を残すことで小西先生に評価をいただくことになったのが、私がホタルの生態を調べるきっかけになりました。光りながら歩くホタルの幼虫を夜通し観察し、その動きの理由を想像して考えることが楽しくなり、一年の半分を夜の森で過ごすようになりました。今では、なじみのフクロウやタヌキと挨拶をかわしながら、夜の森を歩くのが楽しみになっています。

なぜという疑問を聞き届けていただける小西先生がいなくなることの喪失感は大きく、これからは胸の中で語り掛けながら亡き小西先生の声を聞き覚えたいと思っています。小西先生、ありがとうございました、安らかにお休みください。

(蒔田和芳)

お世話になりました小西先生を偲んで

～先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。～

私は小学校時代に東京の江戸川区で育ちました。江戸川の行船公園では毎年ホタル祭りが開催され、小西先生もNHKの取材に同行し、行船公園に来られたとのことでした。

私は、このころよりホタルに興味を持ち、中学校ではヘイケボタルの飼育を行い、自然環境の大切さを感じました。高校では生物部に入部し、ホタルの研究を思う存分するつもりでいましたが、スポーツができるのは今しかないと、野球部の門をくぐることに決めました。

野球部の練習は厳しく、3年間活躍する機会もなかったことから、「やはりホタルの研究をすればよかった。」としばしば思っていました。

大学では土木工学科へ進み、民間のゼネコン会社へ就職しました。会社では、市立の施設の建設工事を行い、森を切り開いて、谷戸を埋めて大規模に駐車場を建設しました。そこには、蛇や蛙、蜻蛉などが生息していました。私が工事の指揮をしたわけではありませんが、中学校時代に思った自然環境の保護とはまるで逆の開発を促進する側に立っていました。

数年後、民間企業より役所の土木課に転職しました。職場では、下水の高度処理水をさらにオゾン処理し、せせらぎを復活する事業が展開されていました。

復活する水路は、生物の棲みにくい直線の水路でした。やはり水路は生物が棲みやすいのがいいと、住民からも役所内部からも話が持ち上がりました。私は会議室でヘイケボタルを飼育することとなり、翌年無事に羽化に成功しました。

自然的なせせらぎの事業も完成し、その後は個人の趣味として一人ホタルの研究をしていました。ネットで知り合った青梅の友人と、青梅の永山丘陵でホタルの観察をしていたところ、偶然暗闇の中で小俣先生に出会いました。さらに、その場でカタモンミナミボタルの幼虫を発見し、陸生ボタルの存在を実感しました。この日以来、板当沢ホタル調査団と共に、クロマドボタルの調査を行いました。

この陸生ボタルの研究は小俣先生のご尽力に加え、小西先生のご指導のお蔭で、「陸生ホタル生態研究会」へ発展しました。

小西先生には15年前より、他のホタル研究会でしばしばお会いする機会がありました。また、渋谷の志賀昆虫館へ行くと、この本はいいよと小西先生の本を推薦され、「ああ、本

当に偉い先生なんだなあ。」と思いました。しかし、陸生ホタル生態研究会では、難しい課題や他の研究者との意見の違いについても、優しく丁寧なご指導で、今まで私が描いていた「偉い研究者」というよりも「優しい教育者」に写りました。高校野球をしてきた私には、偉い人＝威張るというのが、固定観念になっていました。昆虫四天王と呼ばれた小西先生ですが、決して威張るようなことがなく私には、本当に優しい先生でありました。

私は、これから陸生ホタル生態研究会とホタルの研究活動を進める中で、ホタルの生態以上に研究者に対しては優しく接していきたいと思います。

小西先生へ、ご指導本当にありがとうございました。

(大和田 正)

あとがき

・会長死去に伴う追悼特集、大変遅れてご無礼をいたしました。早くに原稿をお寄せくださった方々には深くお詫びをいたします。お許してください。

・2013 年度もあと3ヶ月を残すのみとなりましたが、会長亡き後も、全国の皆さん方の調査研究は休むことなく継続され、日本産ホタルの生態について新たな知見が何本も寄せられています。それらをすべて調査月報に掲載し、3月末までには全国の皆さん方にお届けするように頑張ります。

・昨年11月に、日本ホタルの会のシンポジウムが、東京都新宿区 西新宿の工学院大学で開催されました。この際、日本ホタルの会から要請を受けて、「ヒメボタルの生態についてー陸生ホタル生態研究会の調査結果からー」というタイトルで、陸生ホタル研のこれまでに7年間にわたる皆さん方の調査結果をまとめて、僭越ですが発表させて頂きました。

このプレゼンファイルについて、どんな内容だったのか見たいというご希望がいくつか寄せられています。会員・調査協力者の皆さん方でご希望がありましたら、電話かメールで事務局までご連絡いただければ、送料事務局負担でCDに入れてお送り致します。

・会長の追悼特集の中でも書きましたが、陸生ホタル研の事務局では、現在、日本産ホタル10種の生態研究について、この7年間に会員・調査協力者の皆さん方により、新たに解明された内容を種別に整理してCD版を作成すべく作業中です。現在、6種について、2次案までできあがり、さらに内容の検討を続けているところです。これについても、できるだけ良いものを作るために広く皆さん方のご意見を募集致します。連絡をいただければ、2次案までできた内容を検討していただくためにCDに入れてお届け致します。

以上。